



「島根大学ミュージアム」は、明治時代以来、本学や前身校の教育研究によって蓄積されてきた様々な標本資料などを公開活用する組織で、この度、学内外のご理解とご支援・熱意によって発足いたしました。ミュージアム・ニュースレター創刊号では、新しくできた「島根大学ミュージアム」についての概要をご紹介します。

ミュージアム本館

ミュージアム本館は、島大まるごとミュージアムの「コア施設」です。

建物は、1963（昭和38）年以來、増築されてきた旧RIセンターの建物（平成6～17年度は旧埋蔵文化財調査研究センター）を利用しています。

なかには、キャンパスから出土した考古資料や戦前のチョウザメ標本などが展示してあります。

生物資源科学部2号館の西側にありますので、お気軽にのぞいてみて下さい。



ごあいさつ

日本海側西部に位置し、個性的な歴史・文化・自然資源に恵まれたフィールドにある島根大学では、かねてから研究・教育の過程で収集された標本類を活用する附属博物館の設置が待望されてきました。こうしたなか、学内外のご理解・ご支援が稔り、新しく「島根大学ミュージアム」を発足させることができました。

発足にあたっては、ゼロからの立ち上げが困難であったこともあり、既存の「埋蔵文化財調査研究センター」に新規機能を付加し、新装開店する形態をとりました。1箇所にとまらせた大きな展示スペースや収蔵スペースを確保することも困難であったため、「島大まるごと博物館」というコンセプトのもとで、既存展示施設や野外資料などを「島根大学ミュージアム」と総称し、総体的に活用をはかることとしました。すなわち、まずは、実状にあわせて、旧埋蔵文化財調査研究センターを「ミュージアム本館」とし、汽水域研究センター「山陰地域・汽水域資料展示室」、古代出雲文化資料調査室、附属図書館、ミニ学術植物園など、各部局の既存の個別展示収蔵施設をネットワーク化して、キャンパスツアーや博物館教育などに活用します。加えて、キャンパス周辺は、近世の佇まいを残す松江城下町、国指定史跡の古墳群、ラムサール条約指定の宍道湖など、様々な自然・文化遺産に恵まれていることから、これらも地域施設と連携しながら積極的に包摂して活用をはかろうと考えています。

発足したばかりで、まだ、手探り状態ではありますが、皆様のご指導・ご教示を乞う次第です。

高安 克己（島根大学学術国際担当副学長・島根大学ミュージアム館長）

●ニュースレターのタイトル『SHIMADAI MUSE（シマダイミューズ）』の由来…

世界の博物館の起源は、紀元前300年プトレマイオス朝エジプトに作られた「ムゼイオン（Mouseion）」といわれており、英語やドイツ語のMuseumの語源ともなっています。「ムゼイオン」では、学芸の研究を推進し、講堂を設けて学生を養成し、当時の最新技術による機器や芸術作品・図書などを収集展示していたようです。「ムゼイオン」の名称は、ギリシャ神話の文芸・学術・音楽などの知的活動を司る女神「ミューズ（Muse）」に由来すると伝えられています。

『SHIMADAI MUSE（シマダイミューズ）』は、ムゼイオンの設置理念に改めて立ち返る意味を込めて命名しました。なお、既に『MUSE』を含む名称の刊行物は、カナダ博物館協会などから発行されています。

「島根大学ミュージアム」のめざすもの

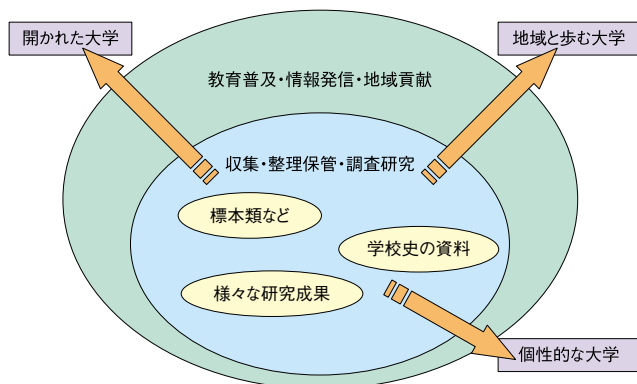


図1 ミュージアムの設置目的

○本学における標本資料類などを大学所有の有形知的財産として位置づけ、それらを収集、整理・保管、調査・研究したうえで、展示公開などによる教育普及、情報発信の促進、地域貢献などを行います。

○総合大学である本学の様々な研究室で行われてきた過去・現在の膨大な研究成果、これからの研究展望などを一般市民に分かりやすく情報発信し、社会に開かれた大学の創造を目指します。

○本学の前身校も含めた長い学校史を調査研究し、顕著な業績を挙げられた教員・卒業生の顕彰などを行い、個性的な学風をもつ大学の創造に寄与します。

島根大学の色々な展示・収蔵施設

「島根大学ミュージアム」は、キャンパスにある様々な施設・資料を「まるごとミュージアム」にしたものです。これは、北欧やフランスなどで発達した「オープンエアミュージアム」・「エコミュージアム」の発想に習ったもので、地域全体を博物館としてとらえ、既存の資源・施設を有効活用しながら、新しい理念を注入して運営していくニューミュージアムの概念です。

「まるごとミュージアム」のコア施設として、「ミュージアム本館」があり、展示活動のほか、総合案内や情報発信などをおこなっています。

松江キャンパス

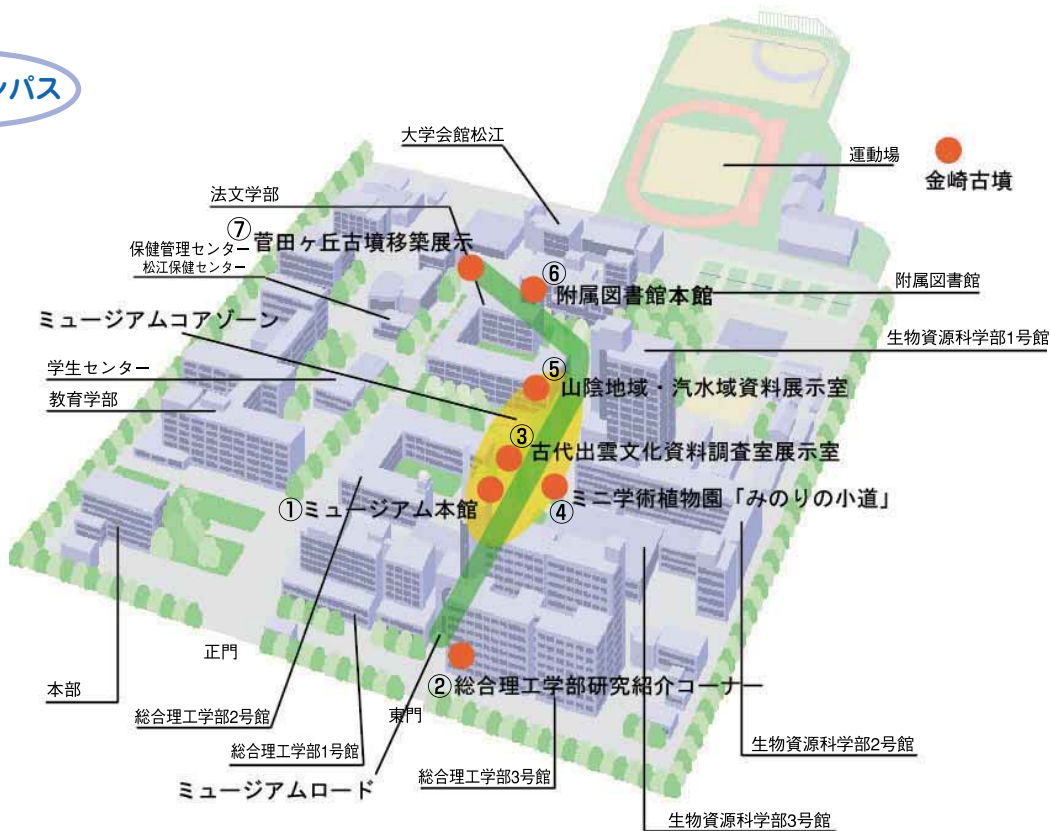


図2 島根大学まるごとミュージアムマップ（松江キャンパス）

- ①**鳥根大学ミュージアム本館** キャンパスから出土した考古資料のほか、チョウザメ・鳥類剥製標本などが展示してあります。
 ■月～金・午前9時～午後5時開館
- ②**「総理工学部」研究紹介コーナー** 総理工学部の教育研究内容や所蔵標本の一部が展示してあります。
 ■月～金・午前8時30分～午後5時開館
- ③**「古代出雲文化資料調査室」展示室** 法文学部考古学研究室が所蔵する考古資料の一部を展示しています。
 ■ご見学されたい方は、ミュージアム本館の職員に申しつけてください。
- ④**ミニ学術植物園「みのりの小道」** 生物資源科学部によって運営されている、くつろぎながら学べる植物園です。
 ■年中無休
- ⑤**山陰地域・汽水域資料展示室** 山陰地域・汽水域に関わる様々な分野の資料が総合展示してあります。
 ■月～金・午前9時～午後4時開館。ご見学されたい方は、ミュージアム本館の職員が汽水域研究センター事務室の職員に申しつけてください。
- ⑥**附属図書館本館** 一般の蔵書のほか、膨大な量の古文書、絵図、貴重資料などがあります。入口を入って左側にミニ展示コーナーがあります。
 ■月～金・午前8時30分～午後9時30分、土日祝休日・午前10時～午後5時30分開館。その他、期間によって開館日・時間の変更あり。
- ⑦**「菅田ヶ丘古墳」移築展示** キャンパス内にあった5世紀後半頃の古墳を移築したものです。
 *すべて見学無料です。①②④⑥⑦は自由に見学できます。
 *屋内施設は、年末年始（12月29日～1月4日）・土日祝休日（附属図書館以外）閉館します。



図3 鳥根大学まるとミュージアムマップ（出雲キャンパス）

- ①**附属図書館医学分館** 一般の蔵書のほか、古医書、明治以前の医療器具などがあります。このうち、医療器具や解説パネルなどが、1階入口や2階閲覧室前廊下の展示コーナーで一般公開されています。
 *2005年10月実施の大森文庫講演会について、館内でDVD視聴できます。
 ■開館時間 月～金9:00～20:00、土・日・祝休日10:00～16:00
 ■休館日 年末年始（12月28日～1月4日）、そのほか分館長が必要と認めた日

モノを楽しむ ～学び舎に残された島大コレクションの数々～

このコーナーでは、本学が所蔵する標本・資料類をご紹介します。

I 鳥根大学構内遺跡出土考古資料

標本点数 約200箱以上

管理部門 ミュージアム

収蔵・展示場所 ミュージアム本館

標本内訳 土器、陶磁器、石器、木器、自然遺物、プレパレート、ボーリングコア、発掘記録図面、写真など

解説 鳥根大学のキャンパス内は、文化財保護法に基づき、大学ミュージアム（平成6～17年度は埋蔵文化財調査研究センター）によって、永年にわたり発掘調査がおこなわれています。

縄文時代前期（約6000～5000年前）頃の松江キャンパスは、ちょうど、古宍道湾（現在の宍道湖）の水辺に位置しており、そこでは、縄文人が漁ろう・狩り・木の実などの採集をして暮らしていました。

遺跡からは、そうした生活のなかで使われていた様々な土器、石器、木器などが出土しています。特に、縄文時代前期の櫛・ヤス柄などの木製品が良好な状態で見つかることは、きわめて珍しく、縄文人の木工文化を知るうえで、大変貴重な資料です。



完全な形で発見された櫛・ヤス柄

1996年・松江キャンパス現武道場（グラウンド東側）出土
縄文前期（約5300年前）、すべてスギ製
櫛Aの長さ178cm・最大径3.5cm
櫛Bの長さ172cm・最大径3.5cm
ヤスの柄の長さ258.5cm・最大径2.5cm



九州・山陰などに分布する文様をもつ縄文土器（鉢）

1994年・松江キャンパス現第2体育館出土
縄文前期初頭（約6000年前）
復元口径29.5cm・復元高15.0cm

II 山陰地域・汽水域資料展示室コレクション

標本点数 約700点以上

管理部門 汽水域研究センター

収蔵・展示場所 汽水域研究センター「山陰地域・汽水域資料展示室」

標本内訳 鉱物、化石、材、材の種子・球果、剥製標本、骨格標本など

解説 本展示室のコレクションは、本学や前身校の永年の調査研究によって収集された、山陰地域・汽水域に関わる様々な分野の資料からなっています。



ニホンアシカ剥製標本（写真提供：汽水域研究センター）

ニホンアシカ（アシカ科）は、カリフォルニアアシカの亜種で、かつては日本海西南部海域を中心に多数生息していましたが、1950年代以降、目撃の記録がなく、絶滅したものと考えられています。

本標本は、1886（明治19）年2月に島根県松江市美保関町で捕獲されたもので、以来、「島根師範学校」に保管されていました。

若い雄で体長120cm。ニホンアシカの剥製標本としては国内でも数少ないものです。国外には、オランダ国立自然史博物館に、江戸時代に来日したドイツ人医師シーボルトが持ち帰ったものが3点収蔵されているほか、大英博物館に毛皮標本1体と頭骨4点があるのみで、世界的にも非常に貴重な標本です。



隠岐馬骨格標本（写真提供：汽水域研究センター）

隠岐馬は、絶滅した日本馬の一種で、体高が低い隠岐在来の馬です。

本標本は、隠岐馬の骨格標本としては、国内唯一のもので、1888（明治21）年3月、島根県松江市にあった獣医学講習所において、家畜解剖学研究のため、獣医・佐藤清明氏の手により解剖、組み立てられ、以来、「島根師範学校」、教育学部に受け継がれました。

12才の雄馬で、生体の毛色は青、丈は1m18cmです。

■ 発行日 2006年7月31日

■ 編集・発行 島根大学ミュージアム Shimane University Museum 〒690-8504 島根県松江市西川津町1060
TEL/FAX 0852-32-6496 ホームページ <http://museum.shimane-u.ac.jp/>